新聞小説の周辺

槌田満文

現在、私は東京新聞の文化部で夕刊文芸欄の仕事を担当しておりますが、きょうは「新聞小説の周辺」という題で、自分の体験をまじえながらお話したいと思います。新聞小説というのは、ひと頃に比べますと、読まれる率が低くなってきているのが実状です。そういう状況の中から新聞小説の特質、また今後どういう形で新聞小説が発展するだろうかといった点について述べてみたいと思います。

全般的に新聞小説がひと頃より読まれなくなってきているのには、いろいろな理由や原因が考えられます。新聞が一番たくさん小説を載せていた時代というのは、昭和三十年頃で、朝刊に二つ、夕刊に三つ。一つの新聞を取っていますと五つの小説が読めた時代でした。その頃が一番全盛期で、当時の調査では読者の40％から50％が読んでいたようです。

現在では、御存じのように朝刊に一つ、夕刊に一つ。それに日曜版に一つ。多くて三つというのが現状です。読者も現在、10％台に落ちているのではないかといわれています。勿論これは、個々のケースによりますからすべてがそうだというわけではありませんが……。

それと比べますと、NHKテレビ小説の「藍より青く」というのは、視聴率50％、昼の再放送を加えると80％というのですから、大変な高率です。まず人数からいきまして五〇〇万から六〇〇万という数になるわけですが、それに比べますと、朝日とか読売のような五〇〇万部を越えている大新聞でも、新聞小説はだいたい五〇万から六〇万の読者しか獲得しえていない。こうした違いが当然新聞小説にもいろいろな影響を与えております。

テレビ小説の場合は、一回が約十五分間。これを枚数にしますと原稿用紙十五、六枚位の長さです。ところが新聞小説というのは、だいたい三枚半が普通です。それに比べますと現在週刊誌に載っている小説はだいたい一回が十五、六枚で、週刊誌の小説の長さがテレビ小説の長さと匹敵するわけです。こま切れの三枚半を毎日読んでいくというような形式は、残念ながらどうも現代の生活のテンポには合わない。どうしてもテレビ小説の方がよく見られるという理由は、まずそういうところにあるのではないかと思います。

こういった傾向が出てきたのは、いつ頃かといいますと昭和三十五、六年ごろのようです。テレビが五〇〇万台つまり大新聞の部数

である五〇〇万を突破したのが例の安保の昭和三十五年でして、ちょうどその頃が新聞小説の一つの転換点でした。NHKテレビ小説のはしりとなった「バス通り裏」は、昭和三十六年度の菊池寛賞を受けています。その後テレビの方はどんどん殖えまして、オリンピックの三十九年には、一千万台をこすというような状況になっております。ところが新聞の方は、それほどの伸びを示していない。どうしてもテレビ小説に新聞小説がまけてしまう。そういうことになったのではないかと思います。

もう一つ、新聞がはさみ打ちになっている状況は、テレビだけではなくて週刊誌というものが出てきたことにもよります。「週刊朝日」が百万部を突破したのは昭和二十九年で、二十五年から吉川英治作の「新・平家物語」、翌二十六年から源氏鶏太作の「三等重役」が始まっています。この週刊誌の小説というものが、新聞小説をかなり追い上げてきたといえると思います。それに加えて三十一年からは「週刊新潮」のように出版社から週刊誌が出始めまして、五味康祐作の「柳生武芸帖」、柴田錬三郎作の「眠狂四郎無頼控」の二本立てでどんどんと部数を伸ばした、という状況があります。新聞小説は、テレビ小説がだんだんと定着して行く、そして週刊誌小説もまただんだんと伸びて行く、その間にはさまって、いわば両方から攻められた。その時期が昭和三十五、六年からであったと考えられます。ちょうど三十五、六年から、そういう意味あいで新聞小説にも一つの変化が現われはじめました。その変化については、後ほどお話するつもりです。

テレビ小説というのは、非常にテンポがありますから、毎日十五分ずつどんどんと視聴者をひっぱっていく。それに対して週刊誌は、武器とするところのプライバシーすれすれの要素、それからエロチシズムをかなりどぎつく出していく。新聞小説に、いわば両側からせまってゆく、という形をとっていたと思うのです。

いま思い出すと、なるほどそういうことだったのだなと思い当たることがあります。それは昭和三十五年から三十六年にかけて、円地文子さんが朝日に「愛情の系譜」という現代小説を書いておられたころのことです。ちょうど私も東京新聞で「女帯」という題の円地さんの小説を担当していまして、時々お伺いする機会があったのですが、ある時円地さんがこういうことをいわれたのです。朝日の「愛情の系譜」にちょっとでもベッドシーンを出すと、担当者にすぐ注意される。読者から抗議がくるからできるだけおさえてくれ、というわけです。ところがその頃、円地さんは「週刊文春」にも「男の銘柄」という小説を書いておられたのですが、この方は逆に、ベッドシーンを出すと「もっと濃厚に」と、担当者から注文がくる。「週刊誌の場合と新聞の場合は全く逆な注文をされるので、よわってしまうんですよ」といいながら書いておられたのですが、今にして思うと、新聞小説と週刊誌小説の、たとえばエロチシズムに対する考え方の違い、それが非常にはっきり出てきた時期だったのだと思います。

それ以来ずっと現在のポルノ小説に至るまで、週刊誌の小説というものは、こういった性格を非常に強くもっております。それに比べると、新聞小説は家庭に入りますから、あまり露骨なものは書けない。私どもの新聞で一度、瀬戸内晴美さんの「妻たち」という小説を載せたことがあります。これがそうとうなモノだったのですが、さし絵が竹谷富士雄さんという非常に品のよい絵を描かれる人

なので、ヌードが出ても、それほどひどい感じはしませんでした。それでもずいぶん読者から電話がかかったり、ハガキがきたりしまして、「家に置いておけない」「子供の目にふれて非常に困る」というのです。そういうことは、ご本人はよく読んでいるという証拠でもあると思うのですが、その点、瀬戸内さんあたりが、新聞小説でエロチシズムを表現する仕方の一番うまい人で、しかもギリギリの限界点までいっているのではないかというふうに思います。

週刊誌ではもう一つ、プライバシー小説というものが、最近だいぶ目につくようになりました。これは、新聞ではそこまで踏みこめない、有名人のプライバシーにふれる内容を小説にする。たとえば、「小説・山田五十鈴」というようなもの、それから堅いところでいいますと、「小説・自民党」です。「週刊文春」に秋元秀雄氏が書いている「小説・自民党」というのは、たとえば総裁選のことを、ひと月もたたないうちに小説にする。そして、中曾根さんが財界の大物に会って、立候補を断念するという時の話が、いかにもそばで見ていたかのように書かれています。そばで見ていてもわからないと思われる中曾根さんの心境まで書いてあるわけです。これがかなり読まれていることは事実ですが、新聞の場合は、どうしてもそこまで踏み込めない。新聞小説として、もしそういうものを出したとすると、やはりいろいろ問題が、おきてくることは明らかです。

たとえば、毎日新聞に「この人と」というタイトルの連載インタヴューが載っておりますが、総裁選で福田赴夫氏が敗れた時、福田氏にいわば敗軍の将の話を、かなり突っ込んで聞き出していました。もしこの内容が小説風にしたてられて、新聞小説として出たらどうだろうか、ということを考えるのですが、その場合は、やはりむずかしい問題が生じてきてしまうのではないかと思います。

テレビ小説のテンポの速さ、それから週刊誌のプライバシー小説とかポルノ小説とかいうものに、はさみ打ちされている新聞小説というものは、ではいったい発生以来どういう性格をもってきているのか、そのことを考えることで、これからどうしたらよいのか、ということを考えてみたいと思います。

まず、新聞小説がそもそもの始まりから持っていた性格の一つに「ニュース性」があります。非常にホットなニュースを読み物の形で提供する。明治八年に平仮名絵入新聞というのに載った「岩田八十八の話」という三回の続きもので、裁判の判決文にもとづいて読み物にしたのが、新聞小説の始まりであるといわれています。ただ、これはフィクションの要素がほとんどないから小説ではないということで、明治十一年の「金之助の話」を新聞小説の始まりとする論者もあります。いずれにしても、一番最初に連載という形で読み物が載ったのは、裁判の公判文によって書かれた「岩田八十八の話」だったということは、そもそもの新聞小説の一つの性格を、出発点から明らかにしていると思います。つまり「ニュース性」です。ところが、これは現在テレビなどの場合の方が、ニュースについては速報性を持っていますので、ニュース性というだけでは現在の新聞小説の特質にすることはむずかしい。ですから、これに新聞ならではの記録性というものを加えて「ニュース記録性」というふうに考えていいのではないかと思います。

二番目に、新聞の場合には、かなり広い範囲に読者がおりますから、そういう広い範囲の読者にサービスするための「地域性」というものが必要になる。非常に古いことをもち出しますと、夏目漱石

の「虞美人草」、これは明治四十年の六月から、朝日に連載された漱石の最初の新聞小説です。漱石は大学の教授をやめて初めて朝日の新聞小説を書くために、たいへんハッスルしまして、サービス精神を非常に発揮しています。一つは、大阪朝日と東京朝日の両方に同時に載るということから、舞台を関西と東京という設定にした。京都の比叡山に登るところから始まりまして、次の章になると舞台は東京になる。東京と京都が入れ違いになって展開していくという構成、これは明らかに読者が関西と東京の両方にいることを意識して書かれたものに違いありません。

それと明治四十年という年は三月から七月まで東京勧業博覧会が上野の不忍の池で、非常に盛大に催されました。この時の博覧会はおそらく、空前にして絶後であったと思われるほどの盛大さで、不忍の池にはじめてイルミネーションがついたのもこの時です。博覧会の最中に始まった漱石の「虞美人草」には最初から、チラチラとこの博覧会の話が出てきます。結末の近くでは登場人物全員に、博覧会の見物をさせていますし、最後の舞台は夜のイルミネーションで非常にきれいな不忍の池の博覧会場です。漱石の新聞小説第一作であったということもあるでしょうが、非常に地域性を意識し、ニュース記録性という点でも、かなり配慮して書かれたといえると思います。

一番目の「ニュース記録性」、二番目の「地域性」、それに続いて、三番目は「タイミング性」です。これは一種の季節感でもあるわけで、たとえば、寒い冬に掲載が始まる場合、小説を真夏の場面から始めるというようなことはできるだけ避ける。だんだん進んでいくうちに、つじつまが合わなくなると、ポーンと一年飛んで、翌年にしてしまうというようなことが、新聞小説の場合はしばしば行われております。

これは季節感に限りません。偶然のことだったようですけれども子母沢寛さんが日経に載せました「勝海舟」は、終戦のマッカーサー厚木到着の日がちょうど江戸城明け渡しの場面になった。偶然とはいえ、なにか共通するような気分で書いたということを、直接子母沢さんから聞いたことがあります。そういう意味合いで、必ずしも現代小説に限らず、新聞小説の場合では、時代小説の場合にも一種のタイミング性があるということがいえると思います。

それと、日本の新聞小説で非常に独自なものはさし絵で、四番目にさし絵の持つ「絵巻物性」について考えてみたいと思います。外国の新聞小説の場合は、さし絵は入っていませんし、今の日本のように三枚半ずつ、毎日載るといった形式も、ほとんどないようです。ですから、この形態は非常に日本的で、日本独自に発達したというふうに考えていいと思います。

現在のように毎回さし絵がつくというのは、だいたい大正七、八年頃から始まったもので、それ以前はほとんどさし絵はついていなかった。新聞小説の中で非常に有名な代表的な作品を拾ってみますと、たとえば明治三十年代では、尾崎紅葉の「金色夜叉」、徳富蘆花の「不如帰」、小杉天外の「魔風恋風」、小栗風葉の「青春」というような一種の風俗性をもった小説が、新聞小説の主流を占めています。四十年代に入りますと、さきほどの漱石の「虞美人草」をはじめ、「三四郎」、「それから」、「門」にしても、みんな朝日に新聞小説として載っています。それにはさし絵がなく、カット程度のものしか入っていません。新聞小説に、内容に即したさし絵が

入るようになったのは、ずっと年代が下がるわけで、大正の七、八年というふうにいわれているわけです。

ただ、四十年代の「三四郎」や田山花袋の「妻」、大正初期の徳田秋声の「あらくれ」とか、島崎藤村の「新生」といった純文学作品が、すべて新聞に載ったことを考えますと、明治四十年代から大正のはじめにかけての新聞小説というものは、非常に水準が高く、多くの作家が力を入れて優れた作品を書いたといえます。

それが、大正の後半になりますと、新聞が非常に読者数をふやしてきた。毎日新聞と朝日新聞が百万部を越えたのが、関東大震災の翌年の大正十三年といわれていますが、大正十四年には都新聞（東京新聞の前身）に載っておりました中里介山の「大菩薩峠」が毎日新聞に引き抜かれました。連載小説が途中で作者ともどもスカウトされて別な新聞に載るという、ちょっと珍しい現象がおきたわけです。その時のさし絵に起用されたのが、石井鶴三という春陽会の重鎮でした。それ以来、木村荘八、中川一政といった画家がさし絵を描き始めます。中川さんのさし絵は尾崎士郎の「人生劇場」が有名ですし、木村さんは永井荷風の「濹東綺譚」のさし絵でよく知られています。そういうふうに、一流の画家が大衆性を持った新聞小説のさし絵を描いたということは、小説の芸術性はある程度低くても逆にさし絵が芸術的になることでバランスがとれた。それが大正の終り頃から、昭和にかけての現象として、非常に顕著だったといえます。

私は、たまたま晩年の木村さんにかなり親しくしていただいたので、木村さんがさし絵についてどういうふうに考えていたか、どういう描きかたをしていたかを、わりに身近なところで、見ることができました。

新聞小説のさし絵というのは、文楽の太夫に対する三味線のようなものだ。太夫が義太夫を語るのに対して、さし絵は三味線を弾くわけで、太夫あっての三味線であり、あくまでも女房役にすぎない。さし絵は小説の女房役である——ということを、非常にはっきり意識して木村さんはさし絵を描かれていたと思います。

ただ、御存じの方もあるかもしれませんが、たとえば、文楽で太夫の方が若く、三味線が老練な人の場合、しばしば逆現象が起きます。三味線の方がちょっと太夫をいじめてやろうとすれば、調子を上げる。そうすると、太夫がついていけなくて、声が出なくなってしまう。木村さんも時々、そういうことをやったらしい。私が直接聞いた話では、邦枝完二作の「媚薬」という新聞小説のさし絵を担当していたとき、小説がだらしないのでさっぱり調子がでない。こんな調子でだらだらやられてはかなわないと思って、木村さんは登場人物をさし絵の中で、小説よりも先に殺してしまった。もうじき死ぬところだったのだと思うのですけれども、それをさし絵の方で先に殺してしまったものですから、作者もしようがなくて、早速殺してしまった、という話を聞いたことがありました。そういうようなことも、新聞小説とさし絵の関係では起こりうるわけです。

さし絵が新聞小説につくようになったことの意味あいは、新聞小説が三枚半ずつに一つの山を必要とすることと無関係ではないでしょう。五、六回も同じ場面のさし絵を描くことはむずかしく、どうしてもテンポの速さが要請されるからです。そういうふうに考えてゆきますと、日本の新聞小説は、三枚半ずつを少しずつ積み重ねていって、それが全部完成した時には、長編として読むに耐える作品

になっていなければならない、という宿命を負わされているわけです。考えてみると、これはほとんど不可能に近いほどむずかしいことだと思います。三枚半ずつをひと区切りにして、それぞれのその回に山があり、次回に興味をひいていくと同時に、それが百回なり二百回なりまとまった段階では、ひとつの長編としての構成を備えているという作品は、まず要求する方が無理というものですが、そういう意味では、日本の新聞小説の性格は、もともと、「絵巻物性」を必要としているのです。絵巻物を見るとき、右の方を少しずつ巻きながら、画面を動かして行く。一定のワクの中に、いつも一つのまとまりがある。そういうものが、少しずつずれながら続いていく。これを絵巻物性といってよいと思います。

そういう日本の新聞小説の絵巻物性について、一番早く論じたのは勝本清一郎さんだと思いますが、昭和十一年に刊行された『日本文学の世界的位置』という本の中で、勝本さんは、日本の新聞小説に、正確な意味でのロマン、つまり長編小説というものは期待できない。新聞小説というものは、あくまでも短編の積み重ねにしかすぎない――と、新聞小説の基本的性格について、かなり悲観的な意見を述べています。

しかし、よく考えてみますと、日本の長編の伝統というものは、『源氏物語』の場合をみましても、ひとつずつ独立した短編が五十四並んでいるという形式をとっている。それにしたがって『源氏物語絵巻』というものも生まれた。その『源氏物語』と『源氏物語絵巻』の絵巻物性は、これまでの日本の長編小説の宿命的な性格だったのではないでしょうか。日本の場合、雄大なスケールをもった西洋建築、もしくは西洋音楽のような構成の長編が生まれないで、どちらかというと短編が並んでいくかたちの長編が多い。これらのことと無関係ではないと思われます。

むしろ新聞小説の場合は、そういう条件があるからこそ、そういう性格を逆手にとって、もっとその性格をフルに生かしたほうがいいのではないかと、私などは考えるわけなのです。

今まで申し上げました「ニュース記録性」、「地域性」、季節感を含めた「タイミング性」、さし絵のもっている「絵巻物性」、それに日本の新聞小説のもっている基本的な絵巻物的性格という点からしますと、いったいこれから新聞小説はどうあるべきなのでしょうか。さっきも申しましたように昭和三十五、六年から、新聞小説は一つの転機を迎え、テレビ小説とか、週刊誌小説に対抗しなければならなくなった。それで、どういう手をうってきたかということをながめてみたいと思います。

まず、昭和三十六年から毎日新聞が「教育の森」という連載を始めました。続いて、「学者の森」、それから「企業の森」を連載しています。これは記者が取材してまわっていろんなデータを集め、それを連載読みものふうに仕立てる、そういう新しいスタイルが出てきました。同時に毎日では「日本人の記録」シリーズという、最近では原奎一郎氏の「ふだん着の原敬」が掲載されましたが、いわばノンフィクション的要素、つまりニュース性、記録性の面からするノンフィクション的な要素で勝負する。そういう傾向で巻き返しを計ろうとしたわけです。

その系列では、現在ではたとえば読売新聞が「昭和史の天皇」を連載しています。新聞小説とは誰も思わないかもしれませんが、一種のノンフィクションで、大勢の記者が取材をしてきてまとめる。

そういう形で続いてきています。作家が書くものでは、朝日の大仏次郎さんの「天皇の世紀」というようなものが、一種の歴史ノンフィクションとして読まれている。絵空事である小説よりもノンフィクションの方が面白い時代ということもありますが、意識的にそういう方向をねらっているわけです。

その点は、現在サンケイで連載中の阿川弘之さんの「軍艦長門の生涯」、その前の司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」なども同じで、小説ではあるけれども非常にノンフィクション性が強い。新聞の持っているニュース記録性にマッチした意味で、ノンフィクションがこれから新聞小説のなかで大きなウエイトを占めるのではないかというふうに考えます。

さし絵の問題についていいますと、昭和三十年頃から、いわゆるシネマスコープの映画が出てきまして、スクリーンの画面が広くなってきた。サンケイが一時、さし絵をシネマスコープにしまして、従来より横幅を少し長くしたことがあります。これはあまり成功しなかったとみえてやめてしまいましたが、現在でもスポーツ新聞ではやっているところがあります。

それから昭和三十七年には、思いきってさし絵の代わりに、写真を使った小説が出ました。朝日にシナリオライターの橋本忍氏による「悪の紋章」という小説が掲載されまして、さし絵の代わりに写真を使ったわけですが、これが一回でおしまいになった最大の理由は、金と手間がかかりすぎるということだったらしい。さし絵の場合には一人の画家が一筆で登場人物を出すことも消すことも簡単にできますが、写真の場合にはそうはいかないから、モデルを使い、ライティングを考えて、背景もちゃんと現場に行って撮らなければならない。非常に金と手間がかかることから、これも一回で終わりになってしまいました。

最近、ちょっと面白いと思いましたのは、朝日の日曜版でやりました〝イラストーリー〟です。「ゴーゴーミュンヘン」という、長尾みのる氏のイラストを使った〝イラストーリー〟、これはイラストとストーリーを合わせた新語ですが、これもその後同じ方針が続いてないところをみますと、やはりむずかしい点があるらしい。ストーリーを担当した虫明亜呂無さんから直接聞いた話ですが、虫明さんの文章は〝イラストーリー〟では、ほんのわずかしか出てこない。しかし、わずかな文章だけでは駄目なので、イラストの絵柄を決めるには、たとえば登場人物の髪の型とか服装とか、いろいろなことを全部書き込んでおかなければならない。紙面に載る文章の十倍くらい書いたという話でしたから、たいへん面倒な仕事なのです。

その点、さし絵の方は、時間的にも早いし、経済的にも安あがりですむ点が強味です。新聞小説のさし絵というものが、これから果たしてどう変わるかはわかりませんが、これまでいろいろな試みがなされたにもかかわらず、現在のパターンが続いているということは、やはり一番長つづきするやり方なのではないかと思われます。

先ほども申しましたように、新聞小説の特質を考えてニュース記録性を強く出すノンフィクションの傾向は今後も一層強くなるだろうと思います。それからさし絵のいろいろな試みは必ずしも成功したとはいえませんが、「ゴーゴーミュンヘン」を御覧になった方はすぐおわかりのように、あれはまさしく絵巻物でした。画面に区切りがなくて、一枚の画が絵巻物的な続き方をしているのです。そう

いう意味で、絵巻物的性格というものを、もう少し考える必要があるのではないかと思います。

ですから私は、ときどき新聞小説をどうしたらよいかという意見を聞かれると、いつもその絵巻物的性格を逆手にとる工夫をすべきだと主張しているのです。たとえば、週刊誌の小説によく見られるように、第何話、第何話というふうに、ひと月ぐらいで第一話が終わり、その次に第二話が始まる。登場人物が同じでも、それぞれ一つずつ区切りのある話が、何回か続く。つまりこれは絵巻物小説の性格ですが、そういうような新聞小説にふさわしい絵巻物性を持たせてみてはどうだろうか。これを新聞でやらないで週刊誌にやらせておく手はない、といつも主張しているのです。

新聞小説が最初の五、六回で勝負がきまるといわれているのは、最初が面白くなければ、すぐ読まれなくなってしまうからで、それを一年も二年も続けていくというのは、考えてみますと実におかしな話です。週刊誌がそういうことをしないで、わりに小間切れにシリーズ小説を載せている理由は、駅の立ち売りが大きなウエイトを占める週刊誌の場合、面白くなければ売れ行きがガタッと減るからです。しかし、新聞の場合は小説が面白くなくても、多くの読者は小説だけが目的でとっているわけではないし、毎日いわば〝あてがい扶持〟で配達されてくるのを待っているわけですから、面白くないと思えば読まなければいいだけのことで、そういう反響がすぐ表われない。最初の五、六回でやめてしまった人があとでまた読み出してくれるかというと、まずそれは不可能な話なのですから、そういう意味では、ひと月位でまた新しい話が始まるというようなスタイルをとった絵巻物シリーズの方が有利なのではないかと考えます。

松本清張さんの『昭和史発掘』のように、ニュース記録性をもったノンフィクションが、何話も続いていくという形式を考えてはどうかというのが私のささやかなプランです。それというのも、今までお話しましたような新聞小説のもつ性格、それから現在置かれている状況、そういうものをふまえて私なりに考えているところであるわけで、はたしてそれが成功するかどうかは、やってみなくてはわかりませんが、機会あるごとに強く主張してみたいと思っています。

まとまりのない話になりましたが、「新聞小説の周辺」というテーマで、日頃私が感じたり、考えていることをお話してみた次第です。

（立正文芸学会での講演より筆記・倉田純子・布施よしえ）